

那智の田楽

那智の田楽は、稲作の動作を取り入れた舞で、打楽器と笛の演奏に合わせて踊られます。この舞は毎年 7 月 14 日に行われる熊野那智大社の火祭で奉納されます。田楽奉納の後、参加者はその年の息災と豊穡を祈願するため松明と神輿を那智大滝まで運びます。

田楽と熊野那智大社

田楽は、その年にたくさん米がとれるよう水田で行われていた歌唱や儀式に由来する芸能です。今日では他の伝統的な音楽や舞踊の影に隠れがちですが、田楽には千年以上の歴史があります。田楽は鎌倉時代（1185–1333）に一世を風靡した芸能で、当時は今より豪華な衣装でより賑やかに演じられていました。後の時代、田楽は能楽に強い影響を与えました。

稲作はその土地の神社と密接に関係しており、多くの場合、田楽の上演は神聖な捧げものとされていました。那智の田楽（the *dengaku* of Nachi Taisha）もそのような田楽のひとつです。

那智で田楽が上演された最古の記録は 1403 年のものです。当時、熊野那智大社は那智山という社寺複合施設の一部だったため、仏僧がこの伝統の維持に助力していました。1868 年の明治維新後、政府は神道と仏教を厳密に分離することを命じました。熊野那智大社の運営体制が大幅に変化した結果、残念なことに田楽の伝統は途切れてしまいました。

1921 年、那智の田楽は、保存されていた記譜の入念な研究と過去の上演を覚えていた年配の氏子の協力によって復興されました。以来、この田楽は毎年熊野那智大社で奉納されています。

那智の田楽の奉納

那智の田楽は、那智田楽保存会のメンバーによって境内の舞台で奉納されます。田楽の後、これらのメンバーは火祭の扇神輿の担ぎ手という名誉ある役割も担います。このことは、この祭りにおける田楽奉納の重要性を示しています。田楽の演者は、主な舞い手 8 人、小さな鼓 4 人、そしてびんざさら 4 人からなります。びんざさらと呼ばれる珍しい打楽器は、何十枚もの小さな木の板を紐で束ねて作られており、波立たせるようにして演奏します。加えて、2 演目だけに登場する「シテン」と呼ばれる舞い手が 2 人と、ずっと座って演奏する笛の奏者が 1 人か 2 人います。歌い手はおらず、笛が唯一の旋律的な要素を担います。

那智の田楽には 23 の演目があり、そのうちの 2 演目はシテンによって演じられます。火祭では約 45 分かけて全演目が上演されます。舞台上で、演者たちは田植え・手入れ・稲刈りを模した優雅

な身振りをしつつ、別々の組に分かれたり、集まったり、再び分かれたりしながら互いの前後や周りを動き回ります。